

# 野菜

## 1 ハウス内の保温対策

ハウスビニールと内張カーテン及び小トンネルやべた掛け資材などを組み合わせることで、保温効果を高めることができます。(図1)

なお、保温効率を高めるために、事前に被覆資材の破損(穴)、きちんと張れているかどうか、カーテンのつなぎ目や重ね目に隙間がないことを点検しましょう。隙間をきちんと塞ぐことで燃料使用量を20%以上改善した事例もあります。

冬季はハウスを開閉しないために湿度が高まるため

結露しやすく、被覆資材間が接着してしまい、保温効果は高まらない場合もあります。保温効果を高めるためには、被覆資材間の隙間は1cm以上空け、隙間が小さい場合には、間にネットや寒冷紗を挟み、空気層を確保することが大切です。

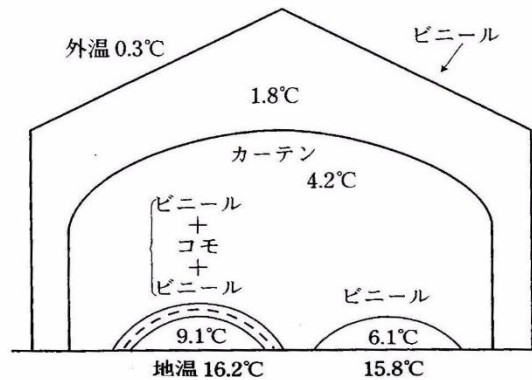


図1 被覆による保温効果

## 2 ハウスの雪害対策

連棟及びドーム型のハウスは耐雪力が劣るので、中柱等で補強しましょう。

- ・中柱は10cm以上の角材または丸太を4m以内の間隔に立て、地盤沈下防止のために必ず台石を置きます。
- ・水平引張線は雪重でハウス側面が開かないようにするためのもので、8~10番線の針金を2m以下の間隔で張ります。
- ・筋交いは、妻面4隅と縦方向へアーチ型にタスキ掛けにします。

雪下ろしは積雪深20cmを目安に、早めに行いましょう。さらにハウス外周(特に両サイド)の雪の除去も怠らないようにしてください。

なお、雪害を受けやすい連棟ハウスは重点的に行い、冬季間に使用しないパイプハウスは、被覆資材を取り外しておきましょう。積雪が続く場合は、ハウス内の暖房機で15°C以上に加温し融雪を促します(暖房機がない場合はストーブを焚きます)。このとき、二重カーテンを開けて、ハウス天井面に直接、暖気があたるようにします。それでも積雪によるハウスの倒壊が懸念される場合は、ハウスのフィルムを切り裂いて雪を落とし、倒壊を防ぐ方法もあります(ただし、積雪量が多い場合は落雪やハウスの倒壊も想定されるので、フィルムの切断の判断は早めに行いましょう)。

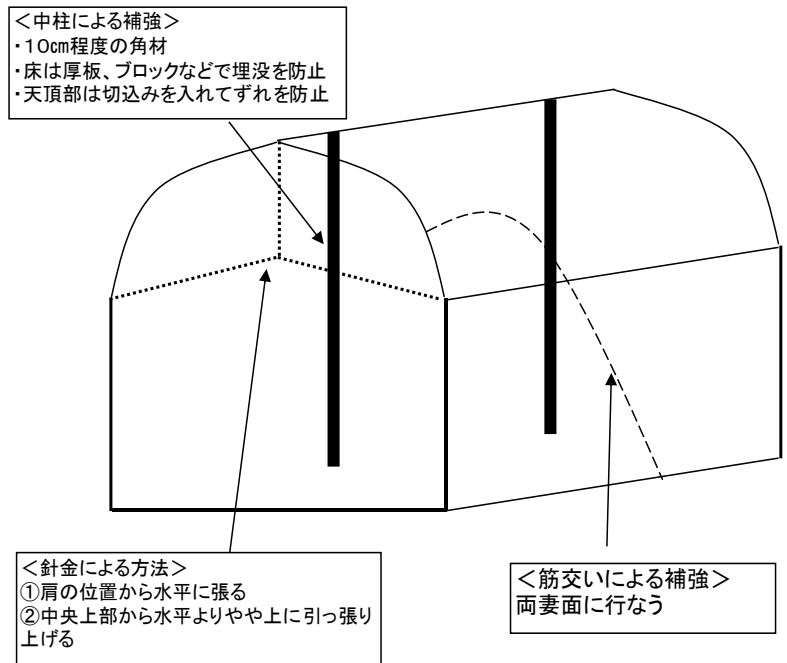


図2 パイプハウスの補強

### 3 トマトの播種後の管理と栽培ハウスの環境整備

半促成作型では定植期の70日前が播種期となります。床土温度(28~30℃)を確保後に、播種、覆土は深さ1cm以上にはしないようにします。覆土後は十分かん水し、新聞紙で覆うとともにビニールと保温資材でトンネル被覆して、保温と床土表面の感想播種後~発芽(3~4日間)までは床土の地温は25~30℃で管理し、一斉に発芽させます。

発芽後の温度管理は日中25℃前後、夜間15~18℃程度で管理します。発芽当初は夜温を高めに管理とし、本葉が見え始めるころから徐々に下げます。灌水は晴天日の午前中に行い、夕方には表面が乾く程度とします(この時期は、日射が弱いとため土壌が乾きにくく、窒素過多や水分過多は苗の軟弱徒長を助長します)。また、発芽当初は日焼け症状が出やすいので、日射が強い日や曇天の日が続いた後晴天の場合は寒冷紗等により日射量を調整します。

前年かいよう病等の病害や害虫の多かった栽培ハウスは、とくにこの時期、雑草や残さを取り除き、支柱等の消毒を徹底しましょう。

### 4 キュウリの播種

1月下旬が半促成作加温作型の播種期(定植期の40~45日前)となります。自家育苗で接ぎ木を行う場合は、穂木は栽培予定本数より1~2割程度、台木は3割程度多く種子量を準備します。播種は条間8~10cm、2cm程度の間隔に条播し、条に対して種子の長径が直角になるように播種し、種が隠れる程度に覆土します。播種後は新聞紙をかけてポリフィルムなどで被覆し、発芽がしたら早めに新聞紙は除去します。温度管理は、発芽適温(25~30℃)内のやや高めの28~30℃で管理し、発芽がそろったら地温を徐々に下げます。

### 5 春作レタスの播種

低温期の育苗となるため、ペーパーポットやセルトレイは、128穴など培土が多く入る穴数の少ないものを選びます。

レタスの種子は好光性であるため、覆土はコーティング種子の頭部が少し見えるくらいに軽く行い、発芽後に再度、わずかに覆土を追加します。

発芽適温は18~20℃ですが、これより低温では発芽までの日数が長くなり、4℃以下ではほとんど発芽しません。一方、30℃以上では著しい障害を起こすため、温床は最低5℃、最高23℃くらいに設定します。温床線を配線する場合には育苗ベットの中央部より端の部分を密にして、育苗床面の温度の均一化を図りましょう。

苗の徒長が気になる場合にはトンネル内の地上部に温床を張る場合もあります(写真1)。

育苗温度が高い場合には軟弱徒長苗にならないよう、日中の高温や夜間の低温を避け、適正な水分管理を行い、活着しやすいがっちりした苗を作りましょう。

かん水は基本的に朝1回とし、培土の状態を見ながら調整します。



写真1 空中温床線配置の育苗床

(写真はハクサイの事例)